

かすかべの復活祭

春日部福音自由教会牧師 小野信一

復活祭が日本の祭りとなることを願って。

復活祭(イースター)は、教会暦の中でも最も重要な日の一つです。しかし日本では、降誕祭(クリスマス)と比べると、復活祭の定着度は著しく低いまです。教会の中でも、復活祭をどのように祝うかは、共通のものが定まっています。

春日部福音自由教会においては、復活祭を一年で一番大切な日として祝い取り組みを続けて来ました。外国語の「イースター(Easter)」でなく、あえて日本語で「復活祭」と呼ぶのは、「外国の祭り」だという印象を与えずに、日本で祝われるべき大切な記念日であることを知っていただきたいと願うからです。

また、教会の建物内だけで祝うのではなく、街や道路や公園に出て行って復活祭を行っています。街の住民の方たちにこの祭りを知って参加していただき、その記念する意義を知っていただきたいという祈りがあるからです。

復活祭は、早朝礼拝からスタートします。午前5時45分から1時間、主イエス・キリストが墓からよみがえったことを記念して礼拝をささげます。復活祭前の受難週は一週間にわたって、受難週早朝礼拝をささげています。

復活祭の朝、近くのビルの屋



上から、バルーンが揚げられます。バルーンには、「主イエスはよみがえられた。ハレルヤ」と書かれています。街の多くの人に、この喜びの知らせが届くように、目に留まるようにとの祈りがこめられています。

野外礼拝

午前8時公園で、野外礼拝がささげられます。まず、ボーイスカウト春日部10団の進級式が行われます。聖歌隊の賛美、祈り、大人と子どもの証しがあります。高橋先生によ



て語られるメッセージは、公園の参加者だけでなく、近隣の方たちにも届いていることでしょう。毎年のように「ケンちゃん」の話が語られて、イエス・キリストの犠牲とすべての人への愛が語られています。

野外礼拝は、公園を使用させていただき、近隣の方々のご協力・ご理解をいただいているおかげで、続けることができます。

パレード

野外礼拝が終了すると、パレードに出発します。公園を出発し、街のメインストリート・ふじ通りを、駅前ロータリーまで行進します。パレードを先導するのはボーイスカウト

で、先導車の後にタンバリン隊と鼓隊の演奏者が行進します。復活を知らせるアナウンスと演奏を交えながら、教会前まで進みます。街の方に一人でも多く復活祭を知っていただきたいと願い、パレードをします。

公道を使用しパレードを開催するにあたっては、警察署から道路使用許可を得て行っています。



模擬店

パレードが教会前通りに到着すると、模擬店がスタートします。



模擬店は、教会前の道路を会場として開かれ、教会の各会や会堂ごとに十数軒のお店が出店します。やきそば、だんご、おでん、ピザ、フランクフルト、ちらし寿司、イースターエッグ、ポップコーン、わたあめ、呈茶(和菓子と抹茶)、さらに

金魚すくいなどです。

受難劇

午後は、腹話術に続いて、受難劇の上演です。

イエス・キリストが弟子たちとすごした様子、十字架の最期と復活のできごとを描くことで、福音を目に見えるかたちで表現しようとしています。

以前は野外劇として上演していましたが、現在は礼拝堂

の中で開催しています。舞台が設営されて、礼拝堂とは違う場所にきたかのように会場は一変し、出演者も観客も、舞台上のキリストとの出会いのドラマに集中します。ドイツのオーバーアマガウでの受難劇は10年に一度の上演ですが、春日部では毎年の復活祭での上演で、2013年で28回目を数えました。

キリストの苦しみを深く想い、キリストの復活を大いに喜ぶ。生きているキリストを伝える。そのために受難週の一週間と復活祭の一日を過ごします。また復活祭は、その証しを一年間続けていくための、教会の一年のはじまりの日であるとも言えるでしょう。

受難劇などにより、街の文化作りの一端を担えるように願い、復活祭が、日本の国に定着することを願っています。

以上



日本人には日本人のように

(昨年 11 月に訪れた、福岡福音自由教会の宮内先生からの投稿です)

高橋敏夫先生をお迎えして、福岡市地域交流センターの一室を借りて一般の方々に向けた講演会を行いました。テーマは“高山右近の生き方に学ぶ”というものでしたが、高橋先生のお話しは、テーマに沿ったものではなく、話があちらこちら多方面へ飛んでいきました。主催した者としては「ちゃんとテーマに沿った話をしてくれないと宣伝が偽りになるではないか？」とはらはらしていました

が、案外集った方々は満足されて楽しそうに聴いておられる様子でした。その経験を通して感じました。高橋先生は聴衆の文化をよく察知しておられる、ということ。そして、日本の歴史・文化とキリスト教との結びつきを自然な形で語っておられるので聴衆は満足されるのだ、ということ。

私自身の意識の中に、「自分は日本人である」ということよりも、「神様の者とされた天国人」ということの方が強かったように思いました。そして、日本の歴史・文化をそっちのけで、こちらの聖書の価値観を相手に押し付けていたのかも知れない、ということを感じました。もち

ろん、神様はあわれみ深いお方ですから、どのような時にも豊かに働かれるお方ですが、この日本の国で伝道していくことの意味について改めて考えさせられた貴重な時となりました。

「すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを福音のためにしています。」《1コリント 9:22 ~ 23》

